

審査の結果の要旨

氏名 長島 弘明

本論文は、近世中期の小説家・国学者である上田秋成（1734～1809）の人と作品を、新たな視点で論じたものである。

本論文は5部から成る。まずⅠでは、秋成の伝記に関係する新見を提示する。従来不明であった秋成の家系について、実母が大和の旧家松尾から出たヲサキなる女性であることを考証し、姉妹の通婚階層（庄屋や著名な医者）から考えて、秋成は言い伝えのように遊女の私生児ではなく、少なくとも母方に関してはしかるべき家系を持つことを証明する。

Ⅱは、従来研究が手薄な、『諸道聴耳世間狙』『世間妾形気』の浮世草子2作について論じたもので、両作が噂話にさらに虚構を加えた、都市風の一種のゴシップ小説であることや、伝承を滑稽化したパロディ小説であることを指摘し、また様式的には全く異なった次作『雨月物語』と、人間認識を一部共有することを明らかにする。

Ⅲでは、乖離しがちな典拠論と主題論を融合・統一させつつ『雨月物語』の分析を試み、また『雨月物語』を生んだ大阪文化壇について考察を試みている。『雨月物語』成立に影響を与えた先行作品『英草紙』との主題的連関や、『雨月物語』の出版の周辺事情を探ることによって、『雨月物語』が文学史から孤絶した作品ではなく、文学史の上で生まれるべくして生まれた作品であることを明らかにする。また従来、女性主人公に同情的であるとされてきた『雨月物語』が、男性の論理に傾いた作品であることを明快に論じている。

Ⅳでは、晩年の代表作である『春雨物語』を、諸本の本文比較を通して検討する。従来諸本研究において最終稿とされている富岡本の位置づけを再考して『春雨物語』の成立過程に新見を示し、また最初期の原稿断片である『春雨草紙』の本文復元と詳細な分析を通じて、『春雨物語』の構想の原型を明らかにする。また、『春雨物語』の発想には、和歌が重要な役割を果たしていることを指摘する。

Ⅴでは、多芸多才の文人である秋成の小説以外の活動を取り上げる。秋成の俳諧の業績を詳細にあとづけ、和文の意義を文体論・表現論の観点から明らかにする。また『春雨物語』などに顕著に見られる、晩年の「命禄」観の成立・展開の様相を、的確に考察している。

従来の秋成研究は、『雨月物語』『春雨物語』の作品論に偏り、また研究者個々の好みに合う秋成像を提示することに力点が置かれ、伝記・作品の基礎的な調査や読解がないがしろにされてきた。結果として、『雨月物語』の作者秋成、あるいは幻妖の作家秋成、というような秋成の一面をもって、秋成文学の全体像とするような傾向があった。それに対し本論文は、歌人としての業績、国学者としての事績など、今後さらに精査を要する点もあるものの、秋成に関わる資料を精査し、作品を丁寧に読解し直すことによって、初めて過不足のない文人小説家秋成の全体像を描き出しているところが卓抜であり、大いに評価できる。よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。